

## project niwa (neighborhood improvement by works of art)

### 作品展示レポート

---



project niwa (neighborhood improvement by works of art)は、京都大学医学部附属病院と京都造形芸術大学ASP学科およびアート・コミュニケーション研究センター（ACC）が共同で進めているプロジェクトです。病院内での作品展示を通して、アート&デザインによる院内環境の改善・コミュニケーションが促進される場づくりを目指しています。学内公募により選ばれた本学学生の作品（約30名の応募から、最終的に4名・5作品が選定されました）が2012/1/6より、特別病棟である積貞棟内の病室4部屋にて展示されています。

2011年6月より開始した本プロジェクトは、ASP学科学生の有志メンバーが中心となって、作品の公募、病院へのプレゼンテーションなどを進めてきました。単にギャラリーで展覧会を企画するのではない病院での展示は、社会とアートとをどのように結びつけることができるか？という問いを考える貴重な機会であったと思います。

例えば、最終的な展示プランが決定されるまでも、エントランスホールの空間デザインを改善する案や、院内でのワークショップを行う案など、様々なヴァリエーションが学生から提出されました。しかし、安全面や患者さんへの配慮により、実現困難となったものが多数あります。



「作品をより良くプレゼンテーションする」という視点だけではなく、パブリックな場所にアートに関わる場合、その場にいる人たちや、そこでの活動とどのようにマッチングすることができるか、という観点を本プロジェクトで実感できたのではないかと思います。



いわゆる「ホスピタル・アート」も、用語としても、活動としても、かなり一般に定着した感があります。しかし、本プロジェクトで実感されたような現場でのすり合わせ、あるいはそもそも「ホスピタリティ」とは何なのか（単に健康を管理するだけのものなのか?）、そこでの「アート」の役割はどのようなものがあり得るか（単に処方箋的な「癒しのアート」だけなのか?）、などといった根本的な議論など、積み残している課題は多いと言えるでしょう。



一方で、チェルシー&ウエストミンスター病院（<http://www.chelwest.nhs.uk/>）のように、ほとんど美術館並みの展示やワークショップが行われている事例もあれば、先の震災ではアート・セラピーによって却って心の傷が悪化する事例（アサヒドットコム記事 <http://bit.ly/jiC3eQ>）も報告されました。

本プロジェクトは、社会とアートの関係について、また元は起源を同じくする「芸術」と「医療」（ars=生きるための術）の関係について、考え、実践していくための最初のステップであったと言えるでしょう。

---

#### 展示作家

中大路彩乃（洋画3回生）、大橋麻理子（洋画2回生）、濁川友里恵（洋画3回生）、門前由美子（染色通信）

#### 学生メンバー

伊藤良平（ASP4回生）、似内達吉（ASP3回生）、中井美穂（ASP3回生）、横木美紀（ASP2回生）

#### 教職員メンバー

福のり子、伊達隆洋、ブブ・ド・ラ・マドレーヌ、北野諒、北村英之